

平和への願いを込めて広島へ

戦争の悲惨さ、平和の尊さを未来につなぐ

市は、平成 27 年 12 月 9 日「平和都市」を宣言しました。この宣言をもとに、市内の中学生代表 10 人が被爆地の広島市を訪れ、戦争の悲惨さ、平和の尊さや命の大切さを学びました。

総務管財課

☎995-1808



平和の尊さを次世代に ～市内の中学生 10 人が広島を訪問～

7 月 26 日(水)から 28 日(金)まで、平和への想いを胸に、市内 5 つの中学校から推薦された代表生徒 10 人が、広島市に派遣されました。広島平和記念資料館で平和学習講座を受講し、本川小学校、袋町小学校などを訪れました。各施設でガイドの解説を受けながら学習し、被爆者の体験講話を聴講するなど貴重な経験しました。現地体験したことや再認識した想いを広く伝え、平和への想いを未来につないでいきます。



◀ 原爆ドーム前でボランティアガイドの岡田さんから説明を受けました。



◀ 中学 2 年生のときに被爆した浅野さんから当時の体験談を直接伺いました。

平和な世界であるために ～今、私たちにできることは～

8 月 8 日(火)、広島市に派遣された市内の中学生 10 人の報告会が鈴木図書館で行われました。平和学習で見たこと、聞いたこと、感じたこと、これから自分たちにできることなど、生徒一人ひとりが平和に対する想いを報告しました。生徒たちは「戦争体験を語ることのつらさを乗り越え、自分たちに話してくれる戦争体験者の想いを無駄にせず、学んだことをみんなに伝えたい」などと、それぞれの言葉で想いを語りました。この報告会の後、同館で開催されている「あいとへいわ展」に、平和についての作文を折り鶴や写真とともに展示しました。

また、参加した生徒のうち代表 2 人が、8 月 15 日(火)に行われた戦没者追悼式で作文を朗読しました。来場者たちは深くうなずきながら聞き入っていました。



▲ 派遣事業報告会で想いを語りました。



▲ 戦没者追悼式で作文を朗読しました。

中学生派遣事業 ～平和への想いを未来に発信～

広島を訪れた中学生の作文を紹介します

西中学校 2 年生

いとう こうへい
伊藤 康平さん

ヒロシマを語り継ぐ



川に浮かんだまま命を落とした人、座りながら骨だけになった人、真っ黒に焼けた人……。

1945 年 8 月 6 日 8 時 15 分。広島に原爆が落とされた。その一発によって全てのものが奪われた。広島の間並みも、たくさんの人の命も、そして被爆した方々の未来も。

原爆には、通常の兵器にはない、熱線、爆風、そして放射能の甚大な被害がある。放射能は、人の細胞を壊し、白血病、悪性腫瘍などを発症させ、72 年経った今もなお、被爆した方々を苦しめている。原爆の子の像を作るきっかけとなった佐々木禎子さんも 12 歳で白血病となったが、治ると信じて千羽鶴を折り続け、生きる希望を捨てずにいた。原爆は罪のない子どもたちの命をも奪ってしまう。

僕はこの平和学習を通じて、悲惨な被爆の実態と、広島の方々の平和への前向きな思いを知ることができた。自分たちが受けた過去を本当は思い出したくないはずなのに、こうして僕たちに語り継いでくれたということは、「もう二度と戦争はしてほしくない、してはいけないものだ」と感じているからだろう。だから、その気持ちを無駄にしないためにも、自分たちにできることをしていきたい。

僕は、今も原爆などの核兵器が存在していることを許せない。今までに起こった歴史の中で、核兵器の使用ほど悲惨なものはないと広島で学習で知ったからだ。2017 年 7 月には、国連で「核兵器禁止条約」が採択された。100 カ国以上が賛成したが、核保有国や日本などは参加していない。

核兵器がなくなれば消すことができる広島の「平和の灯」。だが、これまで 53 年消えずに燃えている。これから僕たちが原爆の怖さを語り継ぎ、核兵器のない世の中を目指していこうと思う。

西中学校 2 年生

すず き もも か
鈴木 桃香さん

2 度目の広島



私は広島を訪れるのは 2 度目です。1 度目は、小学 6 年生の時です。私はその時、被爆したものや、時計を見て、こわいな、いやだな、と人ごどのように感じていました。でも、今回広島を訪れた時は、なんでこんなことになってしまったんだろう、どうしてあんなに小さいものでたくさんの被害がでたんだろうと、たくさん疑問をもち、詳しく知ってたくさんの人にこの気持ちを分かってほしい、そう思いました。その中でも、一番みんなに知ってほしいと思ったのは、入市被爆者の浅野さんのお話しでした。浅野さんは当時中学 2 年生で、7 日の日に広島に入り、とても悲惨な光景を見たのだそうです。建物はなにもなく、遠くの山がとても近くに見えたとおっしゃっていました。そして中でも一番印象に残っていて忘れられない光景は、電車の中に座っている時に被爆し、そのまま骨になってしまっている人、防火用水の中に入って被爆しずるむけになっていた、水につかっているところだけ、肌が残っている人、足が骨だけになっている赤ちゃんを背負って歩いている人たちの姿だとおっしゃっていました。

私はこのお話を聞いて、広島への原爆投下は事実なんだと身にしみて実感しました。そして、心がとても苦しくなりました。たくさんの人が普通の日常生活を送っていたのに、その日常が一発の 3 メートルぐらいの原子爆弾の投下によって奪われたのです。なんの罪もない人がたくさん犠牲になったのです。

私はこれから、この経験をまずは身近な人から伝えて、広げていきたいです。そして、たくさんの人に伝えたいです。人生に一度でもいいから広島を訪れて、自分の気持ちをきちんと持って、もう一度平和について考えてほしいです。

今すぐ発射できる核兵器は 4,120 発もあります。この現実を踏まえ、もう一度自分の気持ちを持って平和について考えたいです。

中学生派遣事業 ～平和への想いを未来に発信～

深良中学校 2 年生

みぞぐち こうすけ
溝口 光翼さん

広島で学んだこと



今年の 8 月 15 日で、終戦から 72 年が経ちます。今回の広島市への中学生代表派遣事業で、僕は現地で見た話を聞くことで、平和について、広島
の原爆のことについて、多くのことを学び知ることができました。

僕は、広島へ行くのは初めてでした。原爆ドームは写真などでは目にしていましたが、実際に見学してみると、当時の様子が見えるようで、胸が苦しくなりました。建物の破損状態はまさに原爆の破壊力を物語るものでした。

現地で、中学 2 年生の時に被爆した浅野さんから、話を聞くことができました。浅野さんは、原爆が落とされたとき船に乗っており、そこでの雲を目にしました。そして広島市に帰った後、残留放射線を浴び、被爆者となったそうです。実際に体験された話を聞くことで、原爆の恐ろしさを知りました。被爆したとき、中学 2 年生とのことで、今の僕と同じ年です。友達も多く命を落とされた聞き、体の痛みだけではなく、心の痛みも大きかったと僕は思います。

広島の人の中には、「もう原爆のことは忘れよう」という人や、「後世に残そう」という人がいるそうです。僕は後世に伝え、同じことが二度と繰り返されることのないようにしなければならぬと思います。戦争はたくさんの人の命を奪い、人々を幸せにすることはありません。まだこの世に、15,405 発もの核爆弾が残されています。もう二度と使われることがあってはならないです。そして世界から戦争がなくなり、平和な世界になることを願います。

今回広島で学んだことを、学校で友達に伝えたいです。

貴重な体験をさせていただき、ありがとうございました。

深良中学校 2 年生

やぶたに はる な
數谷 遥那さん

平和と命の大切さ



私は 3 日間の平和学習で、改めて戦争の恐ろしさと平和や命の尊さを学ぶことができました。

原爆については、テレビや事前学習でなんとなく知っているだけでした。しかし、実際に被害にあった建物や物を見たり、被爆した方の話を聞くと、調べるだけでは分からなかったことがたくさんありました。

原爆資料館の西村さんの話では、「とても小さな爆弾でたくさんの希望のあった人が亡くなってしまっただけで残された人も悲しい」と話してくださいました。インターネットで調べるだけでは分からないような原爆にあった人たちの気持ちを知りました。西村さんは「核をなくすために私たちにできることは署名活動や講演会を聞きに行きみんなに広めることが大切」、「小さなことだが、そういう活動を繰り返すことで大きな力になる」と話してください、私もいろいろな人に広めたいと思います。また、被爆した浅野さんの話には、「いくら伝えても、核がなくなることが悲しい」という気持ちを伝えてくださり、私たちは、原爆について伝えている人たちの気持ちに応えられるようにしないといけないと思いました。

現在は、たくさんの人が核の反対などを、世界に呼びかけているおかげでまだ広島、長崎に原爆が投下されてから一度も人の上には核が落とされていません。それでもまだ、世界には 1 万発以上の核があり、核は無くなってはいません。私たちが生きている間に核が全て無くなることはできるか分かりませんが、平和についてしっかり考え、人から人へどんどん伝えていけば、やがては核を減らすことができるかもしれません。広島での原爆の話を過去の歴史の話、としてではなく、どうしたら戦争、核が無い平和な世界になるか、これらについてつなげていくための話として考え、自分たちの子、孫たちが平和に暮らせる社会になればと思います。

広島市を訪れた中学生の作文を紹介します

東中学校 2 年生

こみや しんご
古宮 伸悟さん折り鶴に平和の祈りをこめて

平和学習講座により、原子爆弾による被害の規模を知りました。被害は、広島市内の全域におよび、建物の 90% 以上が破壊、焼失し、約 14 万人の人々が亡くなりました。これは、現在の裾野市と御殿場市の人口を合わせた人数と同じです。この大きな被害をもたらした原因は、熱線、爆風、放射線でした。

広島平和記念資料館で実物大の原子爆弾を見ました。大きさは、長さ 3 メートル、直径 70 センチで、意外と小さく感じました。被害の大きさに比べ、あまりに小さく、改めて、原子爆弾の威力に驚き、戦争の恐ろしさを知りました。7 月、国連にて核兵器禁止条約が採択されました。これは、核兵器の全廃と根絶を目的とした国際条約です。しかし、まだ世界には、多くの原子爆弾などの核兵器があります。その数は、15,405 発です。その存在が、私たちの平和を脅かしています。

原爆の子の像の周りにたくさんの折り鶴がありました。原爆の子の像のモデルである佐々木禎子さんは、2 歳で被爆し、原子爆弾の後障害により、12 歳で短い生涯を終えました。禎子さんは、入院中に病気の回復を願って鶴を折り続けたそうです。その物語は、世界中の子供たちに伝えられ、折り鶴は平和の象徴となりました。今でも、毎年 10 トンもの折り鶴が届くそうです。それだけ多くの人々が平和を願っています。オバマ前大統領も広島に来訪した際、鶴を折り、戦争被害者の追悼をしました。僕は広島で、悲惨な戦争を二度と繰り返してはいけないという強い思いや、大勢の人の平和への願いを、見たり、感じたりしました。そして原子爆弾の脅威と戦争の悲惨さを知り、平和の尊さについて考えました。

広島では、この心からの強い思いと願いを世界に訴え、伝え続けています。そのことは、大変意味があり、平和な世界のために必要だと思いました。私たちが平和な世界を築いていくためにできることは、この貴重な経験や学んだことを、友達、学校、家族、地域の方々などに伝え、平和への思いを共有していくことだと思います。平和な世界を築き、それが存続していくことを願って、広島で鶴を折り、そこに残してきました。折り鶴に平和の祈りをこめて。

東中学校 2 年生

かつまた ききな
勝又 咲南さんわすれられない過去

私はまだそのとき何も知りませんでした。原爆投下と聞いて私は、原爆が落とされ大きな被害を受けた、これぐらいしか知りませんでした。しかし話を聞くと、私の知らない世界があったのです。今から 72 年前、8 月 6 日午前 8 時 15 分、広島に原子爆弾が落とされました。約 14 万人が亡くなりました。たった一つの核兵器でたくさんの人が亡くなり、町はあとかたもなく焼かれて火の海になりました。目の前に大きな炎が現れて……。考えるだけで怖くなり涙が出てきそうです。他にも家族や友達を助けるために外に出て放射線を浴び亡くなった人もいます。助けたくても助けられなかった人は悔しかったと思います。私も同じ状況にあったら、悔しさと悲しさで胸がいっぱいになります。でもなぜ広島に落としたのでしょうか？それは、当日の天気と人が集まっていた核実験を行うのに適していたからです。町に人が集まっていたのでこれほど大きな被害を受けたのです。この話を聞いたとき私は、何も知らない人々が被害にあわなければならないのか、ひどい、と思いました。何度同じ話を聞いても私は悲しく、悔しくなりました。

今この世界では、広島に原爆が落とされたあと、国に原爆が落とされることはなくなり、平和になりました。広島の人々が、世界にこのようなことはやめようと呼びかけているので、原爆が落とされることはなくなったのです。人は皆、心の中に平和を願う気持ちがあるはずです。私も平和を願う気持ちを持っています。時には大変なこともあり、いやになることもあるけれど、そんな小さなことで問題を起こすのではなく、新しいことを発見していくことがこれからの世界に必要なだと思います。

平和とは何か。私はまだ分かりません。でもこのようなことを二度と繰り返さないように、これからの未来をつくっていく私たちが、平和について真剣に向き合って考えて、平和についてたくさんの人に広めて、平和な世界を私たちの手でつくっていききたいと思います。

中学生派遣事業 ～平和への想いを未来に発信～

須山中学校 2 年生

ねがみ じゅん
根上 純さん

戦争の悲惨さ

たった 3 メートルの原子爆弾。それ一つによって、広島町は一瞬にしてかいめつ状態となった。そして、広島の人々は、一瞬にして大切なものを失ってしまった。

太平洋戦争後半、アメリカはソ連が勢力をつけないようにするため、核爆弾をつかって早期に戦争を終わらせようとした。この考えは、すべて自分の国のために思った行動です。この行動で大切な 14 万人以上の命が奪われてしまいました。この事実を聞いて、とても不思議な気持ちになりました。お互い国は違っても、同じ人間同士です。このアメリカの判断は、自分の国にとってよいかもしれないし、早く戦争が終わるという考えがあったのでしょう。けれども、たくさんの人の大切な家族や人は、一瞬にして奪われてしまいました。たとえ亡くなった人が少なくても、遺族の悲しみは、はかりしれないでしょう。

今回の広島への派遣で一番心に残ったのは、袋町小学校にあった伝言です。そこには、家族をさがす伝言や知人をさがす伝言がたくさんありました。大切な家族をさがす必死さがしっかりと伝わってきました。ぼくは、戦争の悲惨さというものが改めて分かりました。生死が分からない娘への伝言。これを書いている人はどんな気持ちなのでしょう。この伝言を見て、戦争で生死が分からない人をさがす気持ちになり、とても心が痛みました。

戦争はひどいものです。人の大切なものをたくさん奪っていきます。ましてや核爆弾は、一瞬にして、何の罪もない人を奪っていきます。そして、それを悲しむ人がたくさんいます。今、世界では、たくさんの内戦がまだあります。そこでは、自分の意見を主張したり、自分の神のためにと言って戦っています。その人たちを含め、世界中の人が、戦争が奪っていくもの、それを悲しむ人たちの気持ちを考え直し、二度と戦争という過ちをおこさない世界にしたいと思います。

須山中学校 2 年生

ほそごえ
細越 さくらさん

平和な世界実現のために

昭和 20 年、8 月 6 日、午前 8 時 15 分。原爆の投下により、広島街はボロボロになりました。私は今回、その日に多くの人が亡くなってしまったことや、たくさんの大切な建物を失ってしまったという話を、いろんな方から聞かせて頂きました。どの話も悲惨で恐ろしいもので、被爆された方だけでなく、家族などの方々が、苦しく、つらい想いをされたということが、とても伝わってきました。

けれども、私は今の広島市を見て、とても感動しました。写真で見たようにボロボロだったはずの街は、きれいなビルが立ち並び、たくさんの方々がお住まいになっています。さらにその街の中にも、原爆の悲劇を語る建物が残され、たくさんの慰霊碑が建てられ、さらには街中の人たちが原爆のことについて、私たちの知らない知識や想いを語って下さいます。こんなにきれいで良い街に直すまでには、たくさんの方の苦労があったと思うし、被爆者の方は、語ることがつらいときもあったと思います。しかし、そんな想いもふくめて、広島悲劇を私たちに伝えてくださいましたし、広島街も、きれいな街並みの中にある、原爆のつめあとが残った建物からも伝えてくれました。

今、世界には、約 1 万 5 千発の核兵器があり、中には実戦配備されているものもあります。こんなにたくさんの人が平和を伝え続けているにも関わらず、あの日の様に、人々が平和に暮らすところへ、恐ろしい爆弾が投下されてしまう日がくるのでしょうか。あの悲惨な光景が、またくり返されてしまうのでしょうか。たくさんの核兵器問題を抱えている今、昔の様なあやまちをくり返さないためには、たくさんの人の力が必要です。小さくても、多くの人の声があれば、必ず大きな力になります。未来を明るいものにするために、平和を作り出す努力は、決して怠ってはいけないと、私は心から思います。

広島市を訪れた中学生の作文を紹介します

富岡中学校 2年生

こみやま ゆうだい
小宮山 雄大さん僕たちの使命

たった一発の爆弾。車よりも小さな一発の核爆弾によって、一瞬にして広島は灰となり、14万人もの尊い命が奪われた。1945年8月6日、午前8時15分。人類史上初の原子爆弾が投下された。

それから72年たった今年、僕は初めて広島を訪れた。平和記念資料館や本川小学校平和資料館などの資料館には、見ていて気分が悪くなるような展示がたくさんあった。だが、僕の心に一番残ったのは、被爆された、浅野さんの講話だった。

仲間と共に建物疎開作業をした話、投下当日は祖父の家に向かっていただけ奇跡的に助かった話、投下直後、何もかも無くなった広島を、家族を捜すために町中を歩き回った話、そして、この話をするたび、つらい気持ちになるという話……。できれば自分が被爆したこと、そしてその時の様子について話したくはないと思う。しかし、僕たちのために話してくれた。その事に、僕は心を打たれた。

投下から72年経った今、実際に被爆した方々は少なくなり、若者の中には戦争をした事すら知らない人もいだろう。僕たちが広島に派遣された意味、それは、戦争をよく知らない若者へ、戦争の悲惨さ、おろかさを伝えるためだと思う。原子爆弾を体験することはできない。だからこそ、僕たちは、戦争について知っていく必要があると思う。

原爆死没者慰霊碑に刻まれた、「安らかに眠って下さい 過ちは繰り返させぬから」という文字。過ちを繰り返さないため、平和な世界を創っていくためには、何が必要なのか。僕たちはこれからも考えていかなければならないと思う。

富岡中学校 2年生

さいとう みさき
齋藤 岬希さん原爆について考えたこと

「うちは家族全員無事でした」と答えるのがつらかった。これは被爆された浅野さんという方の言葉です。

1945年8月6日午前8時15分、広島に原爆が落とされました。落とされた原爆の大きさはわずか3メートル。しかしその原爆は自身の大きさの何千倍という面積を焼きつくしました。これにより、建物は崩壊し、3～5キロ以内にいた人は即死、軽かったとしても体に火傷をおいました。そのため、たくさんの方々が亡くなりました。

そんな中、浅野さんの家族は、奇跡的に全員無事でした。これは、普通ならとても嬉しいことのはずです。しかし、この頃は「おたくは誰が亡くなったんですか？」とあいさつのように聞かれていました。そう聞かれたとき、普通なら、笑顔でうちは家族全員無事でした、と答えられるのに、まわりがみな家族を失っているでそう答えるのがとても辛かったそうです。こんな悲しいことがあるのでしょうか。こうなってしまったのも全ては原爆のせいです。このようなことがあったにもかかわらず、今、世界中で核弾頭は15,405発、そのうち今すぐ使えるものは4,120発あります。これはとても残念なことです。しかし世界では、裾野市を含む7,392都市が核兵器の廃絶を行っています。この活動がどんどん広がっていくことで世界から核爆弾を少しでも減らしていけると思います。被爆された方の一人はこう言っていました。「私たちは過去は変えられないけれど、未来は作れる」と。本当にそのとおりだと思います。私は、私たちの努力で世界の未来を平和にすることができる。そう信じています。そのためにできる努力を惜しみません。できることは多くないかもしれないけれど、小さなことでも積み重ねていき、一秒でも早く世界が平和になることを望みます。私は、絶対に戦争をくり返さないと誓います。

※中学生のみずみずしい感性を生かすため、原文を掲載しました。